

当報告の内容は、報告者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「『アルタイ型』言語に関する類型的研究」（2015年度第1回（通算第1回）研究会）

Title: Typological Study on “Altaic-type” Languages (The 1st meeting)

日時：2015年5月23日(土)

Date/Time: 23 May 2015

場所：AA 研マルチメディアセミナー室 (306)

Venue: Room 304 (Multimedia Seminar Room), ILCAA

Language: Japanese

1. 主旨説明 山越康裕（AA研）
2. 「アルタイ型言語について」 風間伸次郎（AA 研共同研究員／東京外国語大学）

当該研究課題（以下、課題）の第1回会合として開催した今研究会では、メンバー相互の自己紹介の後、代表者の山越が課題の主旨説明をおこない、その後、メンバーである風間伸次郎氏による研究報告を実施した。研究会は非公開の会合として開催し、国内の共同研究員10名、所員2名のほか、メンバー外から3名の参加があった。

山越による主旨説明では、昨年度の共同利用・共同研究課題審査会で用いたプレゼン資料をもとに、課題の目的・意義・期待する成果等についての説明をおこなった。そのうえでメンバー内で利用するウェブサイトの構築、今後の予定等について参加者と議論した。

引き続きおこなった風間伸次郎氏による研究報告では、「アルタイ型」という類型がいかなるものなのか、ということを確認するために、注目すべき諸特徴を整理する必要があるということを提案したうえで、以下のようないくつかの共有特徴の内的関連性についての仮説を提示した。とりあげた共有特徴とは、「シルバースティーンの提案した有生性の階層に沿った主語の選択」「ニコルズの主要部標示・従属部標示の類型から考える日本語の文のタイプ」「動詞派生法の方法（「自動詞 → 他動詞」への派生法）」「文法的接辞のスキームの大きさ」といった点である。

報告後、これらの内的関連性についてメンバー内で議論した。どの特徴がもっとも根幹にあるということ、つまり「アルタイ型」を規定する必要十分な定義はおそらく困難であるということ、言語ごとにこれら諸特徴の内的関連性が異なる可能性があること、これらが地域的なものなのか、言語普遍的なものなのかを見極めるためには、より詳細に各言語のデータを整理し、比較対照する必要があるとした。また、「アルタイ型」とき

れる言語には範列的な印欧語に対して連辞的であるという特徴もほぼ共有する。この連辞性をどの程度保っているのか、また従属節の主語の人称制限がどの程度厳格かということ、を次回の研究会までに整理することを確認し、研究会を閉じた。

(文責：山越康裕)